

小学校における「異年齢集団による交流」に関する研究 —香川県下の取り組みの調査を手がかりに—

毛利 猛
(学校教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

A Study on Across Age Groups Activities in Primary School : Findings from Survey in Kagawa Prefecture

Mouri Takeshi

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 少子化とともに兄弟姉妹の数が減少し、また地域における遊び仲間集団が崩壊するなかで、小学校において意図的に「異年齢集団による交流」を図ろうとする取り組みが行われている。本発表は、平成23年度に行った調査を手がかりに、香川県下の小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みの現状とこの取り組みに対する教員の意識を明らかにするものである。

キーワード 異年齢集団による交流 縦割り班 ペア学年 兄弟学級 地域ごとの集団

はじめに

少子化とともに兄弟姉妹の数が減少し、また地域における異年齢の遊び仲間集団も崩壊するなかで、小学校において意図的に異学年の仲間集団を組織し、上級生と下級生の交流を図ろうとする取り組みが行われている。そのような小学校における「異年齢集団の交流」のための取り組みのなかには、児童会活動やクラブ活動などのように、教育課程のなかに明確に位置づけられている集団活動もあれば、1年生から6年生で構成された「縦割り班」の活動や「ペア学年」「兄弟学級」の活動のように、教育課程の上での位置づけがあいまいな異年齢集団活動もある。

「縦割り班」活動や「ペア学年」「兄弟学級」

の活動の取り組みは、子どもの健やかな成長を願う教師たちの、それぞれの学校の創意工夫を生かした教育活動として、1970年代の末頃から全国の小学校に広がっていったものであり、筆者が平成14年に調査した時点で、9割近い小学校で実践されていた（「縦割り班」の編成率は76.2%、「ペア学年」「兄弟学級」の編成率は26.4%、いずれかの異年齢集団を編成し、活動している割合は87.2%である）。しかし、こうした心ある教師による苦勞の多い取り組みは、近年、「学力低下」を心配する声が高まり、集団活動のための時間の確保が難しくなるなかで、さまざまな異年齢集団の編成率はともかく、活動の内実と頻度という点では、どちらかといえば後退局面を迎えつつあった。

それだけに、今回の学習指導要領の改訂にお

いて、特別活動のいくつかの活動の内容とその取扱いに「異年齢集団による交流」ということが明記されたことは、大変意義深いことである。取り組むことの意義がなくなったのではなく、取り組むための条件の悪化によって後退局面を迎えつつあっただけに、異年齢集団活動の教育的な意義を理論的に根拠づけ、取り組みの現状と実践上の課題を明らかにすることは、きわめて大切なことであると考え。

1. 調査研究の目的

筆者は、平成23年12月から翌年1月にかけて、香川県下の小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みに関する調査を行った。この調査は、香川県下の小学校における「縦割り班」、「ペア学年」「兄弟学級」、地域ごとの集団などの異年齢集団の編成状況、活動内容と活動頻度(小集会、大集会、当番活動、集団遊び、学校行事、ボランティアなどの異年齢集団での実施頻度)などの現状を明らかにするとともに、「異年齢集団による交流」の取り組みに対する教員の意識—勤務校の取り組みの現状をどのように評価し、成果を上げるための要件として何を重視し、さらには「異年齢集団による交流」に取り組む上での「同僚性」「連携する力」および「異年齢集団による交流」の教育的価値と効果をどのように考えているか—を明らかにするために実施したものである。

2. 調査の概要

(1) 調査対象校

香川県下のすべての小学校179校。ただし分校のある小学校については、本校にのみ調査表を配布。回答は、各学校の特別活動主任または教務主任に依頼した。

(2) 調査時期

平成23年12月

(3) 調査方法

郵送により調査表を配布、郵便で回収

(4) 発送数、回収数

発送数179, 回収数144, うち有効回答144(有効回収率80.4%)

3. 調査結果と考察

(1) 回答校の属性

① 所在地

調査校の所在地別の発送数と回収数は表1のとおりである。東讃地区と西讃地区を比べると、回収率にほとんど差がない(表2)。

表1 所在地別集計

	発送数	回収数
高松市	50	42
丸亀市	16	16
坂出市	13	9
善通寺市	8	7
観音寺市	13	10
さぬき市	13	11
東かがわ市	7	4
三豊市	25	20
土庄町	5	5
小豆島町	4	2
三木町	4	3
直島町	1	1
宇多津町	2	1
綾川町	5	5
琴平町	3	1
多度津町	4	2
まんのう町	6	5
計	179	144

表2 東讃と西讃

	発送数	回収数	回収率
東讃	84	68	80.9
西讃	95	76	80

② 学校規模

回答校144校の学校規模を表3に示すとおりである。ここでは学級数（特別支援学級の数は含まない）によって学校規模を三つに区分した。この区分のうち、小規模校は、1年～6年までの学級数が11学級以下、中規模校は12～17学級、大規模校は、18学級以上の学校である。

表3 回答校の学校規模

小規模校	中規模校	大規模校	計
77	36	31	144

縦割り班の編成
(平成23年香川県調査)

■ 編成している ■ 編成していない

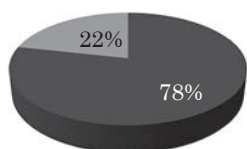


図1-1

(2) 異年齢集団の編成状況

① 「縦割り班」を編成し、活動しているか

1年～6年からなる「縦割り班」を編成し、活動している小学校は、回答校144校中の113校で、割合でいうと78.5%であった（図1-1）。平成14年の全国調査の編成率（図1-2）よりも、やや高い数値である¹⁾。平成23年香川県における「縦割り班」の編成状況を学校規模別にみると図2のとおりである。図2に示すとおり、学校の規模が小さくなるほど、「縦割り班」を編成し、活動している割合が高くなる。

縦割り班の編成
(平成14年全国調査)

■ 編成している ■ 編成していない

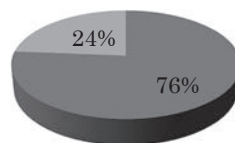


図1-2

同 学校規模別(平成23年香川県調査)

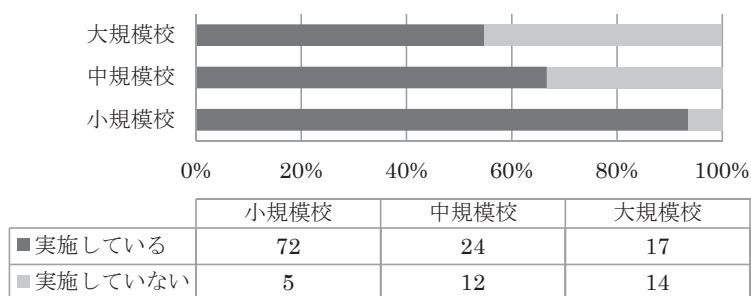


図2

② ペア学年、兄弟学級を編成し、活動しているか

ペア学年、兄弟学級を編成し、活動している小学校は、回答校144校中の88校で、割合でいうと61.1%であった（図3-1）。ペア学年、兄弟学級の編成率については、平成14年の全国調査と比べて高い数値になっている（図3-2）。平成14年の時点の編成率は

26.4%にすぎないから、この10年足らずの間で、ペア学年、兄弟学級を編成し、活動している学校が顕著に増えたことになる。平成23年香川県におけるペア学年、兄弟学級の編成状況を学校規模別にみると図4のとおりである。図4に示すとおり、学校規模が大きくなるほど、ペア学年、兄弟学級による異学年交流に取り組んでいる割合が高くなる。

ペア学年、兄弟学級の編成
(平成23年香川県調査)

■ 編成している ■ 編成していない

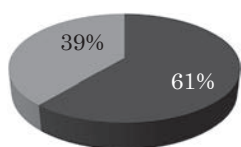


図3-1

ペア学年、兄弟学級の編成
(平成14年全国調査)

■ 編成している ■ 編成していない

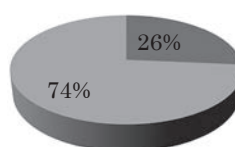


図3-2

同 学校規模別 (平成23年香川県調査)

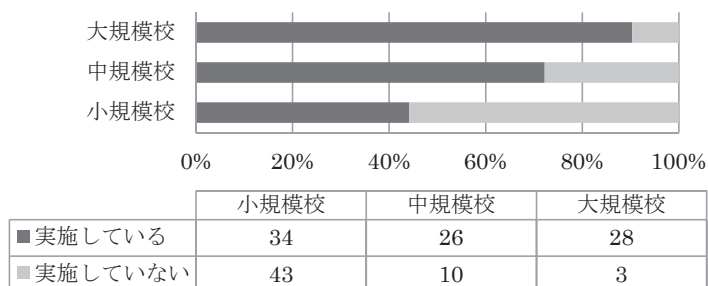


図4

③ 地域ごとの集団を使って、活動しているか
地域ごとの集団 (子ども会、登校班など)

地域ごとの集団の編成

■ 編成している ■ 編成していない

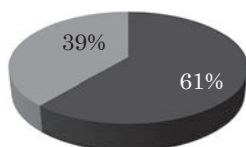


図5

を使って、活動している小学校は、回答校144校中の88校で、割合でいうと61.1%であった(図5)。これを学校規模別にみると図6のとおりである。学校規模別の編成率に、あまり大きな差はない。

以上、「縦割り班」活動、ペア学年、兄弟学級による活動、地域ごとの集団活動という、3つの異年齢集団活動について、学校規模による向き不向きをまとめてみると、「縦割り班」活動は、小規模校向きの異年齢集団

同 学校規模別

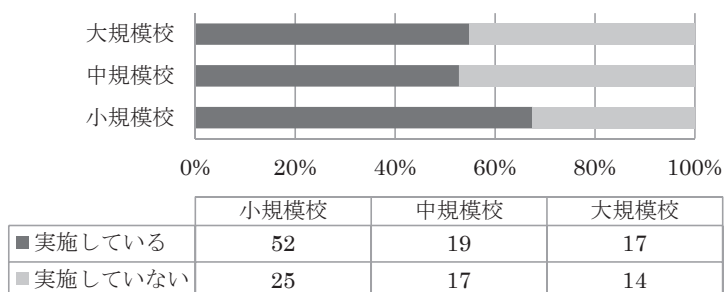


図6

活動。ペア学年、兄弟学級による活動は、大規模校向きの異年齢集団活動。地域ごとの集団活動は、学校規模によらない異年齢集団活動である、ということができよう。

(3) 「縦割り班」の通称、規模と数、編成方法

① 「縦割り班」をどう呼んでいるか

香川県の小学校で「縦割り班」の呼び名として最も多いのは、「色別班」（「色別グループ」「色別チーム」なども含む）である。「縦割り班」を編成している113校のなかの38校がこう呼んでいる。ただし、呼び方には地域性があり、西讃地区のうち、善通寺市、観音寺市、三豊市、まんのう町の小学校でこの呼び方が圧倒的に多いが、東讃地区および丸亀市、坂出市では、「なかよし班」（「なかよしグループ」なども含む）や「ふれあい班」（「ふれあいグループ」なども含む）などの呼び方がポピュラーである。もちろん、「縦割り班」という一般名称を使って、特別な名前を付けていない学校も多い（表4）。

表4 「縦割り班」の通称

色別班	38
なかよし班	27
縦割り班	12
ふれあい班	11
〇〇っ子	4
すまいる	3
フレンドリー	2
その他	7
特になし・無記名	9

② 「縦割り班」の規模、班の数

「班の規模」を、6名前後（3～8名）、12

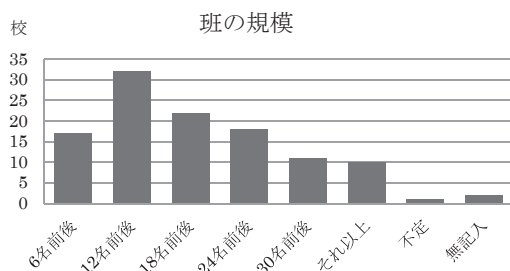


図7

名前後（9～14名）、18名前後（15～20名）、24名前後（21～26名）、30名前後（27～32名）、それ以上（33名～）、不定（班によって人数がばらばら）、無記入という具合に6の倍数の人数で分けたのが、図7である。言うまでもなく、6名前後の班はだいたい同学年1名で構成されており、12名前後の班はだいたい同学年2名、18名前後の班はだいたい同学年3名で構成されている。これをみると、一つの班を12名前後で構成している学校が最も多いことが分かる。

一つひとつのクラスにクラス担任がいるように、「縦割り班」にもそれぞれの班の担当教員がいる。したがって、各学校の「班の数」は、担当する教員の数によってほぼ決まってくる。一人の教員が一つの班を担当すれば、その学校の班の数は教員数（学級数+ α ）×1に近い数、一人の教員が二つの班を担当すれば、班の数は（学級数+ α ）×2に近い数になる。逆に、二人で一つの班を担当すれば、班の数は（学級数+ α ）÷2に近い数になる。大規模校では、教員一人当たりの児童数が多いから、もし一つの班を12名程度で構成しようとするれば、一人の教員が同時に二つ以上の班を担当しなければならない。それを避けたければ、班の規模を大きくするしかない。それに対して、小規模校では、一人の教員が一つの班を、しかも適当な規模の班を担当することが可能である。

③ 「縦割り班」の編成方法

「縦割り班」の編成方法として最も一般的なやり方は、各班の男女比やリーダーの有無、そして兄弟関係などを配慮しながら教師が年度始めに編成するというやり方である。もちろん、これといった配慮をせずに機械的に割り振っている学校も多い。なかには、児童会に編成させている学校もある。「縦割り班」を「色別班」と呼ぶ西讃地区の学校では、班対抗のリレーなどの体育的な活動が多いので、班分けに際して運動能力も考慮に入れている。

(4) ペア学年，兄弟学級の組み合わせ

学年ないし学級の組み合わせは，理論上は全部で15通りあるが，実際の組み合わせは，ペア学年，兄弟学級を編成している小学校88校のうち，
 <1-6, 2-4, 3-5>の組み合わせ…40校
 <1-6, 2-5, 3-4>の組み合わせ…31校
 <1-4, 2-5, 3-6>の組み合わせ…2校
 <1-2, 3-4, 5-6>の組み合わせ…2校
 その他の組み合わせ……………11校
 不明……………2校
 である。ほとんどの学校が，1年と6年の組み合わせ（ペア）を基本にしており，あと2年～5年の組み合わせは，<2-4, 3-5>と<2-5, 3-4>の2パターンに分かれる。その他の組み合わせのなかには，二つ以上の組

み合わせを活動によって使い分けている学校もある。1年と6年の組み合わせ（ペア）が多いのは，多くの小学校教師が，この組み合わせ（ペア）の相性の良さを認めているからである。確かに，小さな1年生は，6年生のお兄さん，お姉さんによくなつくし，また，6年生は1年生に頼られ，彼らの面倒を見ることで成長しているように思う。

(5) 異年齢集団による交流活動の実施頻度

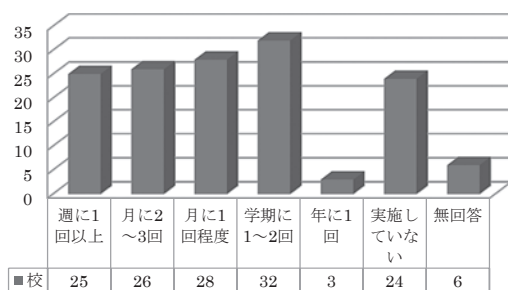
下の表5に分類した「異年齢集団による交流」について，それぞれの活動にどれくらいの頻度で取り組んでいるかを，グラフで示した²⁾。

分類表に示した①～⑩以外で，「異年齢集団による交流」として取り組んでいる活動を具体

表5 「異年齢集団による交流」の分類

①小集会（ショート集会）	異年齢集団で行う集会活動で，朝の時間や業間などの短い時間（15分程度）で定期的に行われるもの。
②大集会（ロング集会）	異年齢集団で行う集会活動で，1単位時間以上をとって行われるもの。（例）レクリエーションやスポーツの大会，季節の集会，1年生を迎える会，6年生を送る会など。
③学校清掃	異年齢集団で行う学校内の清掃。
④栽培・飼育	異年齢集団で行う栽培または飼育。
⑤交流給食	異学年児童が給食を共にする活動。
⑥集団遊び	昼休みや朝の時間などに意図的に異年齢集団で遊ぶ機会を設定したもの。
⑦合同遠足	異年齢集団による交流活動を取り入れた遠足。
⑧運動会	異年齢集団の班対抗の形で得点を競う運動会。
⑨ボランティア	異年齢集団を単位として行うボランティア活動。
⑩共同学習	異年齢集団による交流活動を含んだ学習。（例）生活科の学校探検，総合的な学習の時間での成果の発表など。

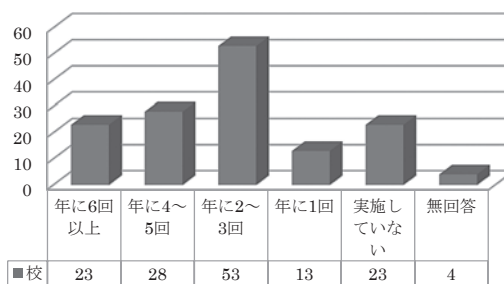
①小集会の実施頻度



n = 144

図8-1

②大集会の実施頻度



n = 144

図8-2

③縦割り清掃の実施頻度

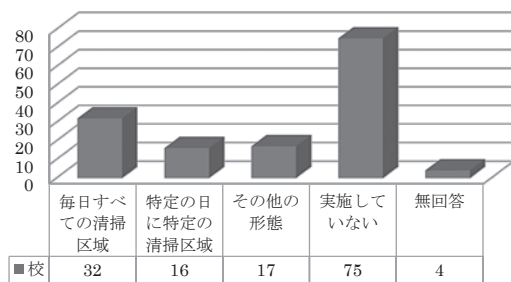


図 8-3 n = 144

④縦割り栽培・飼育の実施頻度

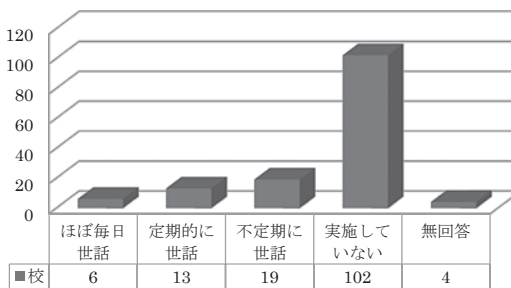


図 8-4 n = 144

⑤交流給食の実施頻度

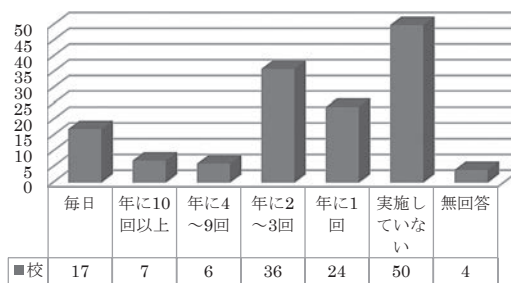


図 8-5 n = 144

⑥集団遊びの実施頻度

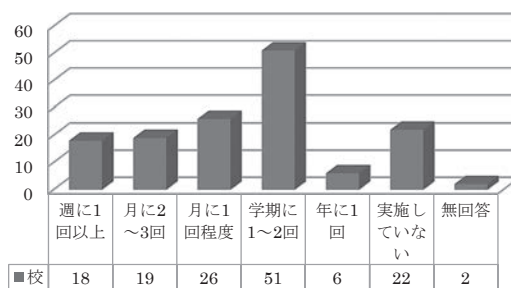


図 8-6 n = 144

⑦合同遠足の実施状況

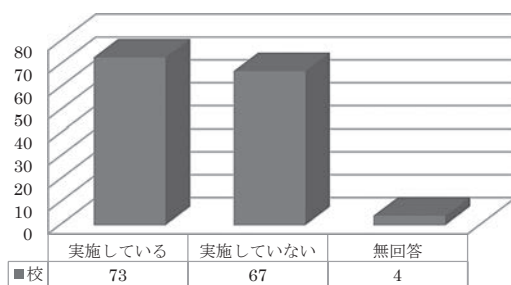


図 8-7 n = 144

⑧異年齢集団対抗の運動会

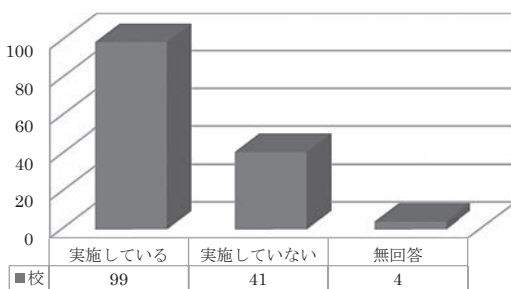


図 8-8 n = 144

⑨ボランティアの実施頻度

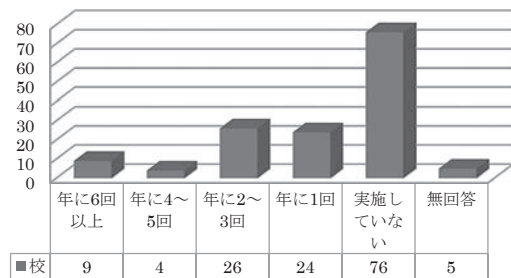


図 8-9 n = 144

⑩共同学習の実施頻度

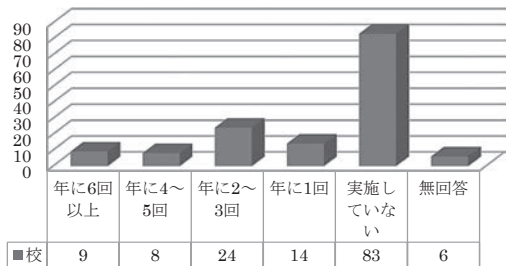


図 8-10 n = 144

的に記述してもらったところ、高学年による低学年への読み聞かせを挙げている小学校が5校もあった。「読み聞かせ」は、最近、徐々に増えている取り組みであるが、これを分類表の「共同学習」のなかに入れるか、「分類表に示したものの以外」とするか、判断に迷った小学校があったと推察される。他には、「あいさつ運動」「合同宿泊学習」などの記述があった。

(6) 自校の取り組みの評価

香川県下の小学校の特別活動主任または教務主任の先生方は、現在勤務されている小学校の「異年齢集団による交流」の取り組み（活動内容、活動頻度）をどのように評価されているのだろうか。自校の取り組みの現状を「十分である」「おおむね十分である」「やや不十分である」「不十分である」という4段階で評価してもらった。下の表6は、その集計結果であり、図9は集計結果をグラフ化したものである。

表6 自校の取り組みの評価

	十分である	おおむね十分である	やや不十分である	不十分である	無回答
大規模校	5	18	8	0	0
中規模校	4	21	10	0	1
小規模校	25	43	8	0	1
全体	34 (23.6%)	82 (56.9%)	26 (18.1%)	0 (0%)	2 (1.4%)

n = 144

自校の取り組みの評価

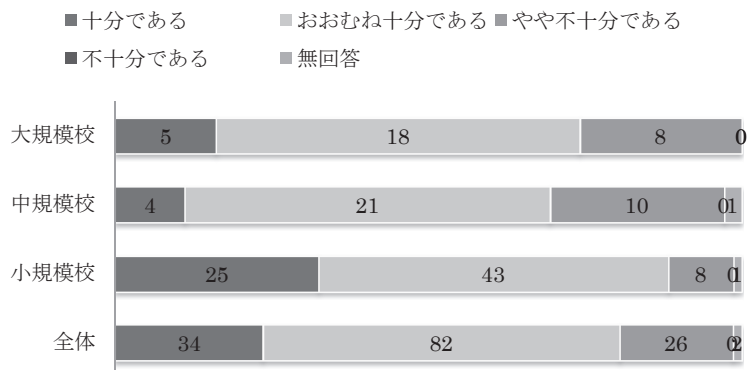


図9

(7) 成果をあげるための要件

小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みが、成果をあげるために必要なことは何か。とくに必要だと思われるもの（要件）を選択肢のなかから3つ選んでもらった。表7を見ると、「異年齢集団による交流」の取り組みが成果をあげるための要件として、過半数の先

生方がリストアップしたのは、①「『異年齢集団による交流』を実施するための時間の確保」、③「実施に当たっての教員間の意思統一」の2項目である。ついで②「教育課程上の明確な位置づけ」、⑥「交流活動の内容の見直し」、⑨「交流活動への児童の意欲、社会的スキル」の項目を選んだ先生方も比較的多い。

表7 成果をあげるための要件

	回答数(割合)
①「異年齢集団による交流」を実施するための時間の確保	101 (70.1%)
②教育課程上の明確な位置づけ	62 (43.1%)
③実施に当たっての教員間の意思統一	87 (60.4%)
④教員の協働意識の高まり, 同僚性の構築	23 (16.0%)
⑤新しい交流活動の内容の模索	23 (16.0%)
⑥交流活動の内容の見直し	61 (42.4%)
⑦保護者・地域の理解と協力	8 (5.6%)
⑧管理職の理解とリーダーシップ	3 (2.1%)
⑨交流活動への児童の意欲, 社会的スキル	61 (42.4%)
⑩その他	1
無回答	4

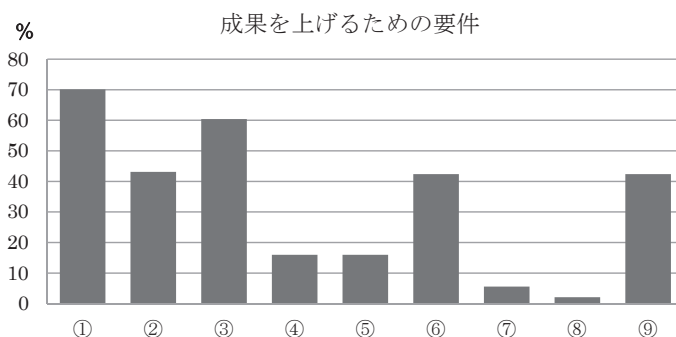


図10

(8)「異年齢集団による交流」の取り組みに対する考え
 活動主任または教務主任の先生方は、どのように思われるのだろうか。「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまり思わない」「全くそう思わない」の4段階で回答してもらった。

下の「異年齢集団による交流」の取り組みに対する意見について、香川県下の小学校の特別

表8 「異年齢集団による交流」の取り組みに対する考え

		とてもそう思う	少しそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答
①「異年齢集団による交流」の取り組みに対する教員間の温度差が広がり、意思統一が難しくなっている。	大規模校	0	13	15	3	0
	中規模校	1	12	18	5	0
	小規模校	3	12	42	20	0
	全体	4	37	75	28	0
②「異年齢集団による交流」に取り組む過程で、同じ学校の教員集団としての協働意識が高まる。	大規模校	5	23	3	0	0
	中規模校	7	22	6	0	1
	小規模校	33	35	9	0	0
	全体	45	80	18	0	1
③「異年齢集団による交流」の取り組みは、何かと手間のかかる活動であるが、あえて取り組むだけの教育的価値がある。	大規模校	20	10	1	0	0
	中規模校	23	12	1	0	0
	小規模校	57	20	0	0	0
	全体	100	42	2	0	0
④「異年齢集団による交流」の取り組みは、教員のかける労力に見合うだけの教育的な効果が認められない。	大規模校	0	1	25	5	0
	中規模校	0	1	21	14	0
	小規模校	0	2	43	32	0
	全体	0	4	89	51	0

①温度差が広がり、意思統一が難しくなっている

■とてもそう思う □少しそう思う ■あまり思わない ■全くそう思わない

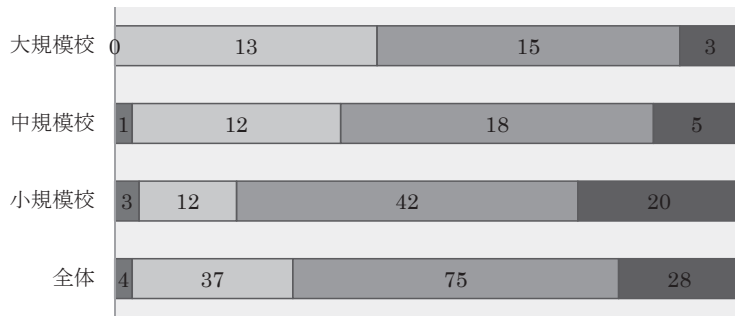


図11

②同じ学校の教員集団としての共働意識が高まる

■とてもそう思う □少しそう思う ■あまり思わない
■全くそう思わない ■無回答

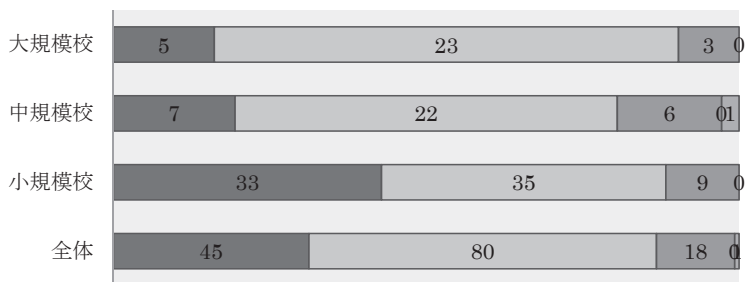


図12

「異年齢集団による交流」の取り組みは、学級や教科という枠を超えた全校的な取り組みであるから、これを実践するには、全校教師の共通理解にもとづく共同歩調と全校児童に対して教育責任を負っているという意識の確立が欠かせない。ところが、教師は忙しくなればなるほど、さらにまた、所属する学校の組織が大きくなればなるほど、自分の学級、自分の教科だけに閉じこもろうとする傾向があって、なかなか「共通理解にもとづく共同歩調」「みんなの担任」というふうにはいかない。①「『異年齢集団による交流』の取り組みに対する教員間の温度差が広がり、意思統一が難しくなっている」と

②「『異年齢集団による交流』に取り組む過程で、同じ学校の教員集団としての協働意識が高まる」は、教師の「同僚性」「連携する力」に関わる質問項目である。香川県の教師の「同僚性」の高さと「連携する力」の強さが、この結果の数値によく表れている。ただし、学校規模別にみると、小規模校よりも大規模校で「温度差が広がり、意思統一が難しい」の項目に、「少しそう思う」と回答する教員の割合が増えて、大規模校よりも小規模校で「共同意識が高まる」の項目に、「とてもそう思う」と回答する教員の割合が増える。

③取り組むだけの教育的価値がある

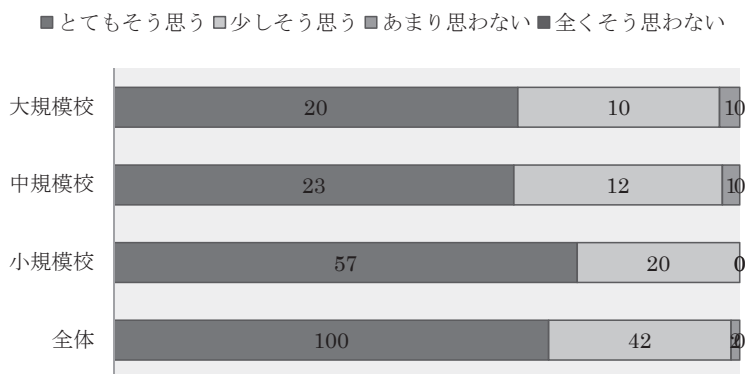


図13

④労力に見合うだけの教育的な効果が認められない

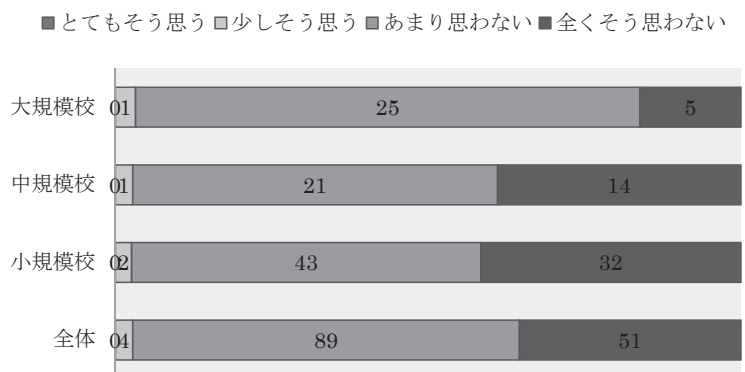


図14

香川県の小学校の特別活動主任または教務主任の先生方は、「異年齢集団による交流」の教育的価値と効果をどのようにみているのだろうか。これに関連する質問項目が、③「『異年齢集団による交流』の取り組みは、何かと手間のかかる活動であるが、あえて取り組むだけの教育的価値がある」と④「『異年齢集団による交流』の取り組みは、教員のかける労力に見合うだけの教育的な効果が認められない」の2つである。結果の数値をみると、香川県下の先生方が、大変忙しいなかで、「あえて取り組む」だけの教育的価値、労力に見合うだけの教育的な効果を認めていることが分かる。

ただし、教育的な効果の認識については、勤務している学校の規模によって若干のずれがあ

る。1学年1学級のいわゆる単学級の学校（小規模校）ではクラス替えがないように、児童数が少なくなると、どうしても「集団に揉まれる」ことがなくなってくるので、「異年齢集団による交流」に取り組むことの意義が大きい。しかも、小規模校の場合、1～6年からなる「縦割り班」活動の組織化にそれほど手間がかからないという利点もある。小さな労力で大きな効果を期待できるのである。ところが、学校規模が大きくなるほど、異年齢集団を組織化して全校の児童を動かすことに、よけいな労力がかかる。そのあたりの事情で、④の質問項目（労力に見合うだけの教育的な効果が認められない）の回答に、小規模校と大規模校との間で、微妙な差が出ていると思われる。

おわりに

今回の調査によって、この10年足らずの間で、比較的規模の大きい学校を中心に、ペア学年、兄弟学級の編成率が顕著に高くなっていることが分かった。もともと「縦割り班」活動に代表される異年齢集団活動は、小規模校においてよく実践されていた取り組みであったが、近年は、中・大規模校においても無理なく実践できる取り組みとして、ペア学年、兄弟学級による異年齢集団活動が急速に普及しているようである。学校規模別による教員の微妙な意識の差はまだまだ認められるものの、それぞれの学校の条件（学校規模もその条件の一つである）に適った「異年齢集団による交流」の実践がこれからも積み重ねられることを期待したい。

註

- 1) 筆者は、これまでに異年齢集団活動に関するアンケート調査を3回実施した。平成12年12月から翌年1月にかけて、香川県の全ての小学校210校を対象に行った調査、平成14年12月から翌年1月にかけて、全国の小学校の4%に当たる940校を抽出して行った調査、そして今回の調査である。ところで、平成12年の調査には、「ペア学年」「兄弟学級」に関する質問項目がなかったために、これらと「縦割り班」との区別が曖昧になってしまった。そこで、平成14年の全国調査では、両者を区別してそれぞれの異年齢集団の編成率を尋ねた。「縦割り班」の編成率と、ペア学年・兄弟学級の編成率について、同じ香川県下の小学校を対象に、平成23年と平成12年との経年比較ができればよかったが、ここでは平成14年の全国調査との比較をした。
- 2) 異年齢集団による交流活動の分類と実施頻度の設定に関しては、藤本 仁、野村隆久、宮内有加、大熊雅士、北村文夫が、平成20年6月に都内公立小学校570校を対象として実施した異年齢集団活動に関する調査において、異年齢集団活動を「ショート集会」「ロング集会」「集団遊び」「合同遠足」「共同学習」「指導体験」「交流給食」「共同作業」「異校種交流」の9つに分類し、それぞれの活動の実施状況を明らかにした研究「都市部の小学校にお

ける異年齢集団活動に関する実証的研究(その2)』(2008年、8月、日本特別活動学会)を参照した。